

活字中毒

校長 佐々木 雅哉

今日も、元気に子どもたちを送り出してくださり、ありがとうございます。先々週には延期になった「体育大会」を行い、これまでの練習の成果を発表し合いました。どの学年も、機敏ではつらつとした発表が光り、お互いに見合った学年から賞賛の拍手が沸き起こっておりまして。保護者の皆様に公開できなかったことは、とても残念であります。学習発表会にはご来校いただけるよう、校内でも引き続き予防に努めます。

10月に入り、めっきり秋が深まって日暮れが早くなりました。秋の夜長、読書にも最適な季節です。活字を読むことが過度に好きな方や読書家を指して、「活字中毒者」と言ったりします。いつも本を持ち歩く、書店に一日居られる、本を読まないと落ち着きがなくなる…などの特徴があるようですが、かく言う私もその一人であります。

と言っても、本を「読む」のが好きなのではなく、本を「見る」のが好きなのです。書籍や印刷物に使われている「活字を見る」のが好きで、その字体(フォント)の使われ方やデザインに見入ってしまいます。これは明らかに本来の「活字中毒者」とは一線を画した、「真性活字中毒者」と自覚しています。

この活字、非常に奥が深く、古くは木活字や彫刻文字、そこから発展した鑄造の金属活字や写植、そして現代のデジタルフォントに至るまで、印刷史の屋台骨を担ってきました。そしてこれまでに、おびただしい種類の活字を生み出してきました。よく耳にし使われる「明朝体(みんちょうたい)」一つとっても、そのデザインは数百種類にも及び、書籍や印刷物の目的に合ったデザインの明朝体が選ばれ、使われています。

この一つ一つの種類の活字には、それぞれに作り手(デザイナー)がいます。そのお一人、小宮山博史さんは文字を作っていく作業について、こんなお話をされています。「僕の場合は最初に50.8ミリの枠を作って、鉛筆でデッサンをして原字を作ります。『阿』という字では、「こざとへん」の隣に「口」がありますね。「こざとへん」と「口」との間が多分狭いなあ、もう少し空けたい、「口」がもう少し右側に行って、上に上がって行く方が良い。右側の縦線のハネとの関係、ハネは左に向かっているので錯覚で少し右に倒れて見える。これは視覚を誘導する力として、ハネが非常に強い影響力を持つために、左に視覚が持って行かれる。とすれば、当然縦線は倒れてしまう。じゃあ、どう直そうか……。」

こだわりの内容となり恐縮ですが、デザイナーの頭の巡らせ方がよくわかります。このこだわり、書写や書道の学習での「思考」によく似ています。文字を書いたり、作品を作ったりしていく途上、文字の組み立てや配列を整えるために、このような考え方をしているように思います。学生時代、研究室でいやいやながら日々文字を書くことに没頭した身、真性活字中毒者となった原因が少しわかりました。



今号の見出しはDHP平成明朝体W7、本文にはUDデジタル教科書体NK-Rを使用しました。

